

健康考えた住宅開発を

住宅産業健康経営フォーラム開催

高齢化社会が進む中、平均寿命と健康寿命の差が男性で約9歳、女性で約12歳もあることから、医療費増大などが大きな問題になっている。6日、東京・千代田区の主婦会館プラザエフで開かれた住宅産業健康経営フ

フォーラム(主催)日本医師会、日本居住福祉学会、埼玉県住まいづくり協議会)では、健康寿命を延長するための方策として健康を基底に置いた住宅開発が注目を集めていることが紹介さ

その上で、超高齢化社会が進む中、高齢者の生理学的特徴を踏まえた住環境の整備が必要だと強調。①高齢者の寝たきりの原因となる転倒・骨折を防ぐための住居構造②

必要になる。医者も診察だけでなく高齢者の住環境にアドバイスできるような視点を持つことが必要だ」と述べた。フォーラムの後半では、3人の有識者がそれぞれの立場から意見を表明。日本居住福祉学会の早川和男会長(神戸大学名誉教授)は、①ロサン

援助、公団住宅棟の回転等を住宅局に連絡する一ことを紹介した。その上で、日本でも住宅分野と医療分野の専門知識を併せ持つ「居住福祉士」という国家資格の創設を提言した。埼玉県住まいづくり協議会の鈴木静雄副会長は、マンシヨンの企画建

無限だ」と述べ、業界がこれまでのスタンスを転換していく必要性を強調した。女性だけの建築設計事務所ドムステザインの戸倉馨子代表は、看護師から建築士になった経歴を生かした取り組みを紹介。ナイチンゲールの看護書では特に疾病原因の半分は住環境にあるとされていることを指摘、人間が再生される環境づくりのポイントとして「光と風を取り入れる」「味気ない家から感性の育つ家へ」「色気がある」ことの三つを挙げた。

フォーラムは、「住宅政策に医療を、環境を！」をテーマに行われ、日本医師会の今村聡副会長が基調講演。今村副会長は、高齢者が居住する住宅のうち「手すりの設置」「戸内の段差の解消」「広い廊下幅の確保」といったバリアフリー対応が全て整っている住宅の割合は6・7%、借家の場合は2・6%という状況を紹介した。

家族の心と体養う家に 「居住福祉士」創設を提言

温熱環境を整えた住居の必要性などを訴えた。今村副会長は「最近では、センサーやウェアラブル端末を活用した健康増進のためのツールの開発(スマートハウス)が進んできている」と語り、「これからは住宅建築の発想と医者の考えをすり合わせていくことが

ゼルスのデベロッパーを訪ねた際、赤ちゃんから高齢者まで健康をケアしてきた保健師の経験を生かす②フランスでは社会保健師が2〜3人ほど病院に勤務し患者の退院時に、事前に家を視察し予後のリハビリ、療養等が可能かどうか点検、困難な場合は住宅改善費用の

設・販売会社のリブランド・取締役会長を務める立場から、「建物のハードだけ価値としていたことに限界があった。建物や住宅は手段であって価値ではない。本当の価値とは目に見えないもの。子供たちや家族が生き生きと心とか体を養っていくことにある。そのことに気付けばマーケットは

具体的には、インテリアデザインを依頼された福岡県八女市の姫野病院では、階ごとに色の色調を変えるなどして色彩を取り入れたほか、老いてもおしゃべりを忘れないために玄関に姿見を設置することをアドバイス、段差も身体機能を後退させないために必要で、家も老いに合わせて変化していくべきだなどと訴えた。

具体的には、インテリアデザインを依頼された福岡県八女市の姫野病院では、階ごとに色の色調を変えるなどして色彩を取り入れたほか、老いてもおしゃべりを忘れないために玄関に姿見を設置することをアドバイス、段差も身体機能を後退させないために必要で、家も老いに合わせて変化していくべきだなどと訴えた。



住宅産業健康経営フォーラムに登壇した有識者、左から今村聡・日本医師会副会長、早川和男・日本居住福祉学会会長、鈴木静雄・埼玉県住まいづくり協議会副会長、戸倉馨子・ドムステザイン代表=6日、東京・千代田区



各階を世界旅行のイメージでデザインし、色彩を取り入れた姫野病院=ドムステザイン提供

ほのぼのの家族

作：むらぼん Vol. 28 ジェラシー①



(佐藤元國)